No.189

# 健康教育®

— 健康なくして教育はありえない —

◎ 子どもの感性と表現する力を育てるための音楽 …… 岡本　拡子

◎ 生き物や自然と関わることで子どもの心に育つもの …… 梶原　裕二

# 「健康教育®」

## ――健康なくして教育はありえない――

**1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。**

薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目　　次


3　子どもの感性と表現する力を育てるための音楽

8　生き物や自然と関わることで子どもの心に育つもの

15　あらまし


表紙：社会福祉法人 虹旗社 のはら保育園（東京都　杉並区）

# 子どもの感性と表現する力を育てるための音楽

高崎健康福祉大学 人間発達学部 子ども教育学科教授
NPO法人わくわく広場の会理事長
**岡本　拡子**

## はじめに

OECD(経済協力開発機構)の学習到達度調査(PISA)の結果が2019年12月に公開されました。この調査は、OECDが2000年より実施しているもので、3年ごとに義務教育修了段階の15歳を対象として、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査がおこなわれるものです。2018年に実施されたこの調査結果によると、日本は加盟国37か国のうち、数学的リテラシー及び科学的リテラシーについては引き続きトップレベルでしたが、読解力に関しては、OECD平均より高得点グループに属するものの、前回より平均得点・順位が統計的に有意に低下しました。この結果について、OECDは「読解力の自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き課題がある」としています1)。

● OECD加盟国(37か国)における比較

[ ]は日本の平均得点と統計的な有意差がない国

| | 読解力 | 平均得点 | 数学的リテラシー | 平均得点 | 科学的リテラシー | 平均得点 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | エストニア | 523 | 日本 | 527 | エストニア | 530 |
| 2 | カナダ | 520 | 韓国 | 526 | 日本 | 529 |
| 3 | フィンランド | 520 | エストニア | 523 | フィンランド | 522 |
| 4 | アイルランド | 518 | オランダ | 519 | 韓国 | 519 |
| 5 | 韓国 | 514 | ポーランド | 516 | カナダ | 518 |
| 6 | ポーランド | 512 | スイス | 515 | ポーランド | 511 |
| 7 | スウェーデン | 506 | カナダ | 512 | ニュージーランド | 508 |
| 8 | ニュージーランド | 506 | デンマーク | 509 | スロベニア | 507 |
| 9 | アメリカ | 505 | スロベニア | 509 | イギリス | 505 |
| 10 | イギリス | 504 | ベルギー | 508 | オランダ | 503 |
| 11 | 日本 | 504 | フィンランド | 507 | ドイツ | 503 |
| 12 | オーストラリア | 503 | スウェーデン | 502 | オーストラリア | 503 |
| 13 | デンマーク | 501 | イギリス | 502 | アメリカ | 502 |
| 14 | ノルウェー | 499 | ノルウェー | 501 | スウェーデン | 499 |
| 15 | ドイツ | 498 | ドイツ | 500 | ベルギー | 499 |
| 16 | スロベニア | 495 | アイルランド | 500 | チェコ | 497 |
| 17 | ベルギー | 493 | チェコ | 499 | アイルランド | 496 |
| 18 | フランス | 493 | オーストリア | 499 | スイス | 495 |
| 19 | ポルトガル | 492 | ラトビア | 496 | フランス | 493 |
| 20 | チェコ | 490 | フランス | 495 | デンマーク | 493 |
| | ＯＥＣＤ平均 | 487 | ＯＥＣＤ平均 | 489 | ＯＥＣＤ平均 | 489 |
| | 信頼区間※(日本):499-509 | | 信頼区間(日本):522-532 | | 信頼区間(日本):524-534 | |

<OECD の学習到達度調査>文部科学省・国立教育政策研究所 HP より

この調査結果が示すものは、「日本の子どもは読解力が弱い」ということや、「世界に比べて学力が高くない」ということを意味するものなのでしょうか。私は「自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き課題がある」ということに、今日の日本の子どもたちの課題があると感じます。というのも、この傾向は子どもだけでなく、私がこれまで関わってきた大学生の多くにも見られるからです。人前で自分の意見を述べたり感想を述べたりすることに対して、多くの若い世代の人たちは苦手意識を感じています。それは、「他者と異なる言動をする」ことに対して遠慮したり、他者と協調することを重んじたりするなど、批判的な意見を述べることをどちらかといえば歓迎しないといった日本人の国民性にも関わっていると考えられ、そう簡単には解決しない問題なのです。

しかし、日本の幼児教育では、もう30年以上も前からこのことを問題であるととらえ、子どもの表現する力を育てるための教育が大切だと主張し続けています。幼児教育は義務教育ではありませんが、近年ではほとんどの子どもが幼稚園、保育所、こども園等に通ってい

ます。幼児教育の無償化も始まって、これから益々幼児教育の質が問われる時代となります。幼稚園、保育所、こども園といったそれぞれ特徴の異なる就学前の施設において、子どもの育ちが異なったり、得られる教育の質に差が生じたりしないように、新しく改定(改訂)された保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領において、3歳以上児の教育の内容に関しては統一した記述になりました。

本稿では、幼児教育の中で大切にされてきた子どもの感性と表現する力を育てるための教育について述べ、子どもが自己を表現するための手段のひとつである音楽的表現を育むことの必要性について考えます。

## 感性を育てることの必要性

小学校以上の教育とは異なり、幼児期の教育では、国語、算数、理科、社会、音楽、体育、図画工作といった教科ごとの学習は行いません。しかし、言葉を話したり、絵本やお話を聴いたり、数に興味をもったり、自然のなかで起こる様々な現象に不思議さを感じたり、探究心をもったり、身体を動かして遊んだり、歌を歌ったり、絵を描いたりモノを作ったりというように、発達に必要な経験を積み重ねるなかでさまざまなことを学んでいきます。子どもは「遊んでいるだけ」というように見えるかもしれま

せんが、その遊びを通して自ら環境と積極的にかかわり、自分で考えたり、友だちとイメージを共有したり、他者と協力したり、友だちや先生と過ごす楽しさを感じたりといった、人として生きていくために大切な「人格形成の基礎」を培っていくのです。

幼稚園、保育所、こども園は子どもにとって生まれて初めて経験する「社会」ですから、自分の思い通りにならないことや、友だちと喧嘩することもあります。ただ楽しさだけを経験するだけでなく、悔しい思いや思い通りにならない葛藤なども経験します。このようなさまざまな経験を積み重ねるなかで、「自分の思いを他者に伝えること」や「他者の思いを理解すること」の大切さを学んでいきます。その過程では、自分の経験するさまざまな感情・心情は一体何なのか(この気持ちは「楽しい」なんだ、この気持ちは「悔しい」なんだなど)ということも理解していくようになります。つまり、「自分の考えたことや感じたことを表現する」ことの前に、まず自分が感じていることをきちんと受け止めたり理解することが大切になるのです。

幼稚園教育要領等では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点から示された「感性と表現に関する領域『表現』」の中で、以下のようにねらいが示されています。

① いろいろなものの美しさに対する豊かな感性をもつ。
② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

さまざまな心動かされる体験を積み重ねること、その中で感性を豊かにしていくこと、そして感じた気持ちや考えたことを自分なりの表現であらわしていくことの大切さがここに述

べられています。そして、このような「心の育ち」を促していくためには、保育者など身近な大人の存在が欠かせません。自分の表現が認められたり、感じたことに共感してもらえたりする経験はその人に対する信頼感を生みます。その信頼感は子どもが安心して過ごすことができるための基盤となり、情緒の安定に繋がります。「安心」と「安定」がなければ、子どもは新しいことに挑戦したり、困難なことに立ち向かう意欲をもったりすることも困難となります。感性や表現する力を育み、身近な大人への信頼感、そして安心感や安定した情緒は、子どもたちがその後の人生を力強く歩んでいくための基盤となり、将来の夢や目標をもち、その目標に向かって頑張る力、学習意欲へと繋がっていくことを私たち大人はきちんと理解しておく必要があります。

## 子どもは誰もが音楽的な存在

保育の現場での音楽表現活動について、領域「表現」に示されたねらいに照らし合わせて考えると、それは「歌を上手に歌えるようになること」や「楽器をミスなく演奏できるようになること」が目的ではないことが分かります。音楽の演奏家になるための特別な訓練をする場ではない公教育の音楽のあり方として、どの子どもにも等しく歌を歌ったり音楽を楽しんだりする経験ができるようにすることが最も大切であろうと考えます。

その視点から子どもたちの様子をよく見ると、何気ない遊びのなかで、自分なりに音楽を楽しんでいることに気がつきます。写真1と2はこども園の2歳児クラスの子どもたちの様子です。ひとりの女児が棒で鉄棒の淵を叩いていました。すると「カンカン」とよく響く面白い音がしました。何度も繰り返して叩く女児の姿に気づいた保育者はその音を面白がり、保育者自身も女児と一緒に叩いてみました。すると他の子どもたちも女児のまねをして同じように叩き始めます。その遊びは他の遊具にも広がって、次はみんなでうんていを叩き始めました。

ひとりの子どもが発見した「棒で鉄棒を叩くとよく響いて面白い音がする」遊びの面白さに保育者も共感し、一緒に遊び始めることで、子どもには保育者に認められたという嬉しさがあり、遊びがさらに楽しいものとなります。

写真1

写真2

写真1・2<園庭で音遊びを楽しむ子ども>写真提供：赤城育心こども園（群馬県前橋市）

それを見ていた他の子どもたちもやってみたくなって、みんなで「叩いて音を鳴らす遊び」を楽しむことができました。

ここでは、叩き方の正しさや良い音を出す方法などの技術的なことは何も必要ありません。しかし、「音を見つけた喜び」や「音を鳴らす楽しさ」という経験は、子どもたちがこれから音楽を楽しむ経験を積み重ねるなかで、大切な学びの基盤となるのです。

また、ある幼稚園では、保育者は子どもたちの歌声の「怒鳴り声」が気になっていました。歌う活動を見ていた私は、子どもたちがピアノを弾く保育者の背中を見ながら一列に並んで歌っていることがとても気になりました。子どもたちは一体誰に自分の歌を届けているのでしょうか。先生や他の子どもの背中をみながら歌う歌を「誰かに聞いてもらいたい」、「音楽を届けたい」と思うでしょうか。そこで私は、輪になってお友達の顔が見えるようにして歌ってみることを提案しました。音楽はそれを演奏する人と聴く人の間に生まれるものであると日頃から考えていましたので、「お友達に歌を届けてみよう」という言葉かけをして、大好きなお友達のために歌うことや、大好きなお友達と一緒に歌うことの喜びや楽しさを感じてほしいと思ったのです。子どもたちの怒鳴り声はすぐに変化したわけではありませんが、このことが歌う活動の本来の意味について保育者自身も考えるきっかけとなり、「どのような声で歌うか」ではなく「どのような気持ちで歌うのか」を考えながら活動をすることによって、少しずつ子どもたちの歌声が変わっていきました。

子どもたちに「怒鳴って歌ってはいけません」という否定的な、あるいは禁止の言葉で指導するのではなく、「誰かを大切に思う気持ち」や、「大好きな歌を大切に歌う気持ち」を伝えることで、子どもの歌声は変化していくと思います。大好きな人やモノを大切にすることと同じように、大好きな歌を大切にする気持ちを育てることで、歌声がやさしくなるだけでなく、子ども自身の心のなかにも音楽を愛する気持ちが育っていくのです。

これらの事例は、「子どもがモノを叩いていることには意味があるかもしれない」、「子どもが怒鳴り声で歌うのは歌う楽しさを味わえていないからかもしれない」といった、子どもと音や音楽との関わり方に対する見方を変えてみることの大切さを示唆しています。このように子どもの音楽的表現をとらえてみると、どの子どももみな音楽的であることが分かります。

## 豊かな感性を育てるための音楽の力

私たち大人は子どもの学力を、読み書き能力、学習達成度テスト、成績などで判断してしまいがちです。このようなテストや成績で測定することができる能力は「認知能力」といわれ、もちろん学力のひとつを判断するものとなります。しかし、認知能力はただ勉強さえしていれば発達するというわけではありません。認知能力の発達には、「非認知能力」と呼ばれる社会情動的スキルの発達が不可欠なのです。社会情動的スキルとは、「一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、フォーマルまたはインフォーマルな学習体験によって発達させることができ、個人の一生を通じて社会経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能

力」であるとされ、スキルの3つの分類として、①目標の達成(忍耐力・自己抑制・目標への情熱)、②他者との協働(社交性・敬意・思いやり)、③感情のコントロール(自尊心・楽観性・自信)が挙げられます2)。とくに乳幼児期における社会情動的スキルの発達がその後の生活や学力に大きな影響を与えることが明らかとなっていて、新しく改定(改訂)された保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領において示される資質能力の3つの柱の1つである「学びに向かう力・人間性等」の育成に関わるスキルとして、今日の日本の幼児教育においても重要視されています。社会情動的スキルは認知能力の発達の基盤となる「子どもの心の育ち」に関わるスキルといえます。

幼い子どもたちにとっての音楽表現活動は、「音楽の演奏法や技術を学ぶ」ことが目的ではなく、「音楽を通して心の育ちに繋がる様々なことを学ぶ」ことが目的なのです。それは、歌を歌ったり演奏したりすることの楽しさ、音や音楽に親しむことを通して様々に心動かされる経験をすること、そして友だちや保育者などと一緒に音楽を楽しむ喜びを感じることです。このような音楽的な経験の積み重ねによって、感性が育ち、表現する喜びを知ります。そのことが社会情動的スキルの発達へと繋がり、やがて学齢期になった時に、学ぶ楽しさを感じたり、意欲的に学ぶ姿勢を身につけたりするのです。私たち大人は、何かができる・できないで子どもの力をつい判断しがちです。それは結果がよく見えるからです。しかし、子どもが何を感じ、どのように感性が豊かに育っているかということは、数値で表すこともできなければ、一見するだけでは判断することも困難です。また、今感じたことがすぐに表現としてあらわれないこともあり、子どもの心の中で静かに少しずつ熟成されていることもあるのです。保育の中での音楽的な経験の積み重ねはそのような心の育ちにとって意味のある、そして価値のあることであることを決して忘れてはいけないのです。

## おわりに

本稿では、幼児期の子どもの音楽的な経験が、豊かな感性や表現する力を育てることや、その後の人生を生きていくうえで欠かすことができない人格形成の基礎を培うことに繋がることを述べました。私たち大人は、子どもと関わるなかで、日常生活の中の何気ない出来事を一緒に面白がったり、風が木々を揺らす音に耳を傾けたりするなど、子どもとともに心動かされる経験を共有していくことが大切です。音楽は特別なものではなく、歌を歌ったり楽器を演奏したり音楽を聴いたりすることが日常生活のなかに当たり前のように存在することで、子どもの感性はますます豊かになっていくでしょう。そして上手にできるかできないかで判断するのではなく、音楽に親しんだり楽しんだりしているその姿を受け止め認めていくことによって、子どもは自分なりの表現をすることができ、表現してもよいのだという安心感を得ることができるのです。

---

1) PISAの結果については、国立教育政策研究所のホームページにおいて詳細をみることができる。https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html#PISA2018
最終閲覧日:2020年1月13日

2) OECD(編), ベネッセ教育総合研究所(企画), 無藤隆, 秋田喜代美(訳):社会情動的スキル−学びに向かう力, 明石書店, 56, 2018

# 生き物や自然と関わることで子どもの心に育つもの

京都教育大学生物学教室・教授
附属環境教育実践センター長
**梶原　裕二**

本文は京都市子育て支援総合センターこどもみらい館平成25年度第4回共同機構研修会の資料を健康教育用に一部変更したものとなります。

## 普段の生活で

普段の何気ない生活で、時に生物は面白い姿を見せてくれます。ある年、新聞に「こんなチューリップを見つけました」という記事が掲載されました。茎上部の葉が部分的に花と同じピンク色になっているのです。私自身も何十年もチューリップを花壇に育てていますが、このようなチューリップは見たことがなく、

ある年の春・・・不思議なチューリップの花発見！

驚いていました。しかし、その後、近所の家や幼稚園の花壇で葉っぱが色づいているチューリップをいくつか見つけることになりました。毎年の植物をずっと見ていると、時折、このような奇妙な現象を目にします。大人にとっても、生き物の観察は思いがけない発見のチャンスです。

## 私と生き物

私が幼稚園の頃「この花、ヒメジョオンって言うんだよ。先生に教えてもらった」と言っていたと、大人になってから母親に教えてもらいました。自分では全く覚えていないのですが、小さい時から花、昆虫、動物が好きな子どもだったそうです。そのような話を聞くと、「今このような仕事をしていていいのだな」と勇気づけられた気がしました。子どもたちは小さな頃の記憶を忘れてしまうかもしれませんが、大人がこのようなエピソードを拾い集めて残し、子どもたちが大きくなった時や職業を選択する時にいろいろと話してあげることで、その子をそっと後押しし、勇気づけるのではないかと思います。中学・高校では生物部で蝶の採集をしていました。家では、ブンチョウ、セキセイインコ、ジュウシマツ等の小鳥を

飼育していました。大学では両生類のイモリについての実験発生学を研究し、その後、羊膜をもつ哺乳類マウスの研究を続けました。

京都教育大学では生物学基礎実験を担当し、授業で使用するイモリを毎年100匹ほど採集していました。京都の北の山間部にはイモリがまだたくさんいます。5月の連休明け、田んぼを耕し、水を張っている時期にイモリが出てきます。イモリは動かないで隠れているため、簡単に網で捕まえられます。おもしろいのは、最初に雄がたくさん捕れ、2～3回同じ場所に網を入れると、やおら雌が捕れるのです。雌の方が慎重なのかもしれません。イモリの体は頭、胴、尾と4本の足があり、脊椎動物の四足動物の特徴が学べる良い材料です。また、幼生はエラ呼吸、親は肺呼吸をします。カエルも両生類なので、オタマジャクシもエラ呼吸をしていますが、エラが体に内包されているので外からはわかりません。イモリ幼生のエラは外にあるのでエラ呼吸がすぐわかります。

雌は太っていて、尾が丸く、長くなっています。雄は体がゴツゴツしていて、後ろ足の付け根に精巣の膨らみがあります。5月の繁殖期には雄の尾が青や紫の婚姻色をしています。雄は尻尾を雌の横でヒラヒラさせ求愛行動をとります。雌が受容すると、雄は精子の袋を落とし、雌がそれを体内に取り込み受精卵を産む、変わった生殖行動をとります。大学での実習後、親と幼生は採集地に戻し、発生過程の姿のみを拝借する形で実施しました。

春のめざめ、イモリたち。

イモリを使って小学生への授業もしました。子どもたちに、親の雌雄の違いを見つけてもらうのですが、ほとんどの子どもは真剣に、楽しそうに見てくれます。しかし、毎年、イモリを苦手な子どもが2～3人います。ところが、そういう子どもも2時間の授業の後では慣れてきます。好きな子どもは手に乗せたり、流しに水を溜めて多くのイモリを泳がせたりするなど、本当に楽しく遊びます。ここで、野生動物や汚い土を触った時の注意点があります。イモリを触ったら、手を洗う。子どもは何気なく目を触りますので、目をさわらない事に注意して下さい。乱暴にイモリを扱わないで下さい。それらの点を注意すれば、歩行も緩やかで逃げる心配もほとんどなく、泳ぐ姿も大変可愛らしい動物です。

4～5年前にいつものようにイモリの採集をしていたのですが、採集後、何気なく田んぼから青空に目を移した時、ふと「今年もイモリがいた、今年もイモリに会えた」と感じたのです。それまで30年間ずっとイモリを捕まえてきたのですが、そのようなことを感じたのはその時が初めてでした。「イモリ」という存在に、その時初めて気付いた気がしたのです。

大学に帰ってすぐに「生物」「生き物」という言葉を辞書で引いてみました。

「living system」…「生きているもの」

「creature」…「創造物」欧米では、神様が創造したものなので文芸には時々使われることがあります。

「organism」…「生物」自然科学分野ではこの言葉が使われています。organとは器官、袋という意味で、生物が非常に整った形をしている、組織立ったものという意味でも使われます。

そして、「being」…これも「存在、生き物」という意味です。

レイチェル・カーソンが『沈黙の春』の中で、鳥が鳴かない、鳴かないから翻って鳥の存在

に気付く、と書いているように、存在が当然と思っていたイモリから、改めて存在の気付きや大切さを教えてもらいました。

また、beingのように、そこに存在するためには、必ず経過やプロセスがあるはずです。動物も私たちも繰り返される世代を経て、35億年の過去から連続し、接続して現在に存在しています。そして未来にも生き物、私たちが存在するということを考えると、未来への視点も大切だと思えてくるのではないでしょうか。

## 自然体験・直接体験の大切さ

以前に参加した理科教育学会で、シンポジストの先生が、西表島の美しい風景の写真を提示され、「この写真から潮の香りや潮風、塩辛さ、ここにいる生き物を感じますか」と問いかけられました。そのような事柄は写真からは出てきません。直接体験なくしては感じることができないのです。

平成24年度幼稚園教育理解推進事業において、白梅学園大学の汐見先生が『幼児の自然体験野外活動の大切さ今の生活に少ないもの』をテーマに講演されました。その中で、高知の幼稚園では、保護者が寄付された里山で子どもたちが楽しく遊んでいる事例、札幌の郊外の幼稚園では、林間の斜面を利用して、親子一緒になって遊んでいる事例をお話されました。また、「最近星空を見ましたか」と問いかけられ、大人が自然に目を向ける大切さについても話されていました。

養老孟司さんと宮崎駿さんの対談が書かれている『虫眼とアニ眼』の中に、「家をかえよう、町をかえよう、子供達に空間と時間を!」と語り合われています。まずは町の一番いい場所に保育園をつくる。緑や土がたくさんあり、テラスや斜面もあるような立体構造で、子どもたちは泥んこになって夢中で過ごし、家に帰りたくないような保育園を作ろうと描かれています。

様々な方が自然体験や直接体験の大切さを伝えておられます。私も妻も生物を専攻していましたから、春先にはハイキングに出かけます。5月にはシャクナゲを見に行きました。そこで、谷間に倒れている大きな丸太の上側に、小さな枝が一列にいっぱい並んで生えているおもしろい光景を見ました。多分その倒木はまだ生きていて、重力の関係で、一番軽いところに枝が出ているのだろうと語り合いました。

このように、実体験としての自然や生き物は、ものの存在や周囲の変化に気付くきっかけを与えてくれます。特に日本には四季があるので、自然や生き物の変化に気付きやすいのではないでしょうか。そして、その時に、観察力を育成したり、視覚や嗅覚等を通してものを認知したりすることが、自然体験・直接体験となります。そのためには、自然と触れ合う場所を残していくことが重要だと思います。

散歩の途中、道端のタンポポ、オオイヌノフグリ、ナズナ・・・。

## 自然と触れ合える場所を

京都教育大学には、樹木や緑がたくさんあり自然観察ができます。以前、構内でキツネが出るらしいと噂が流れました。そこでビデオを設置したところ、ホンドギツネが映っていました。ホンドギツネが人に近いところに出てくるのは珍しいことです。若いおそらく同腹の二匹のキツネが、伸びをしたりじゃれあったりする可愛らしい様子でした。タヌキも出ます。

その翌年、宇治川の河川敷に学生と野鳥観察に行きました。そこには、立派なヨシ原が残され、ツバメの営巣地になっており、ヨシキリなど様々な野鳥が観察できます。ヨシ原の裏側の人がほとんど行かない所を歩いていると、30m向こう側にキツネがヒョコヒョコと出てきました。気配を感じたのか、こちらをちらっと見たのです。2～3分お互いに見合っていたのですが、まずいところを見られたなというような顔をして、隠れていきました。このような場所があれば、そんな珍しいものも観察できます。

イギリスには様々なサイズの『フットパス』が設けられています。フットパスとは、イギリスを発祥とする森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くための小径のことです。たとえそれが私有地の中であっても、一定のルールのもとに、通行することができます。イギリス中至る所にあり、簡単に散策ができ、自然と触れ合うことができます。

京都にも、御所や鴨川、宇治川等、いろいろな所に自然と触れ合える場所が残っています。田んぼのあぜ道でも、タンポポやナズナ、ホトケノザ、オオバコ、オオイヌノフグリなどの草花と出会い、遊べると思います。

このように自然環境を町の中に残し、自然体験・直接体験できたらいいなと思います。

## 子どもと生き物との関わり

動物行動学者であった日高敏隆さんのエッセイに『世界を、こんなふうに見てごらん』があります。レンゲソウや菜の花、スミレ、タンポポ、モンシロチョウ、ナナホシテントウムシ等が描かれとても美しい表紙です。「はじめに」の部分には「見て気がついていくことで、気持ちがわかる気がした」と書かれていますが、自然と向き合う上でとても重要なポイントだと思います。第1章「『なぜ』をあたため続けよう」の中には、「なぜ?」と「不思議」の大切さが書かれています。私もそう思います。好奇心や興味、関心は「なぜ?」「不思議」から出てくるからです。

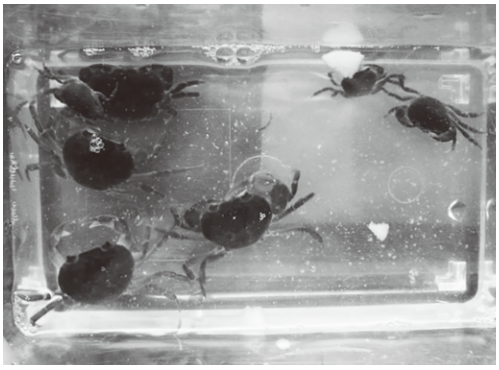
ところが、保育園(所)・幼稚園の子どもたちには、「なぜ?」という言葉がわかるのかどうか、わからないところもあります。

京都教育大学附属幼稚園の卒園式で副学長が来賓の挨拶をされ、「挨拶をしましょう」、「ご飯をいっぱい食べましょう」、そして3番目に「不思議を大事にしましょう」と言われました。そこで、子どもたちはきょとんとしていたのです。更に、「例えば、春になったらチョウチョが飛ぶね。チョウチョは飛べるけれど、君たちは飛べる?」と尋ねられたところ、3～4人の子どもたちが立ち上がり、その場でピョンピョンと跳び始めたのです。私は「幼稚園児は飛べるな」と隣の先生と笑ったものですが、子どもたちは「不思議」というものをそのまま受け取ります。小学生や中学生になり、自分の中に概念が形成され、それが揺さぶられた時に初めて「不思議」と感じるのではないでしょうか。子どもたちは「不思議」というより「何か違うもの」を感じ取っているのではないかと思います。それは本当に大事なことです。

子どもたちが自然体験や不思議のもとを引き出し、伸ばしていくために、私たちはどのように関わればいいでしょうか。河合隼雄さんの著書『子どもの宇宙』の第3章「子どもと動物」の中には、「子どもたちは動物とのつき合いから、人間としてのつき合い方について深く学んでいるようにさえ思われる」という文章があります。言葉をうまく話せない小学生の男の子の話です。クラスで飼っているカメを、その男の子はとても可愛がっていたのですが、ある日いなくなってしまいます。そうすると、今までしゃべれなかったその男の子が、「カメがいなくなった」としゃべったのです。動物との触れ合いから子どもの言葉が引き出されています。そこには担任の先生である大人の関わりの大切さについても書かれています。この本の中にはこのような動物との関わりのエピソードがたくさん書かれています。様々な方が、子どもと生き物との関わりがとても大切だと示唆しています。

## 園で生き物を育ててみよう

ある時、大学の渓流昆虫の授業でサワガニが捕れたため、幼稚園に持って行きました。子どもたちは、まず「(自分が)欲しい!」と言います。それから、「皆で飼おう」ということになりました。さて、どうして飼えばいいのか…。子どもたちは図鑑で調べ始め、ミミズを食べるということをつきとめました。さっそく園庭にミミズを探しに出かけ、何匹か見つけて、水槽の中に入れてみました。しかし、いっこうに食べてくれません。子どもたちがワイワイと賑やかに見ているので、サワガニは警戒して食べないのです。ちっとも食べないので子どもたちは飽きてしまったかと思っていたのですが、しばらくすると「食べた!」という声が聞こえてきました。子どもたちはずっと静かに見ていたのです。


色々な大きさのサワガニ達、パンの餌をあげてみました。

翌週には、年長組の子どもたちが自分たちの保育室に持っていって飼うことにしたようですが、「サワガニが餌を食べているから静かにして」と子ども同士で声をかけあっていました。その後も図鑑を持って、園庭でのミミズ探しが続いたのですが、ふと水槽を見ると、石ころや小さなカリンの実、ダンゴムシ等が入っています。「ミミズを食べたから、ダンゴムシも食べるのかな」「この実はどうだろう」と思って入れたのでしょう。何でも入れる子どもたちの遊び方に驚きました。

ザリガニも面白い動物で、保育園(所)・幼稚園でも身近な生き物でしょう。サワガニやザリガニは、節足動物門十脚目と分類され、エビ、イセエビ、ヤドカリ、ズワイカニ等と同じ仲間です。体のつくりはフシフシしていて、体節からできています。ダンゴムシもそうですが、子どもはフシフシ動物が好きなようですね。節にそれぞれ一対の脚、付属肢がついた基本構造をしています。動物の雌雄は大変面白く、ザリガニやカニの雌雄の違いも腹部からを見るとよくわかります。雄の交尾肢、雌の生殖口を調べてみて下さい。

京都教育大学附属幼稚園では、年長児がニワトリの餌やり当番をしています。子どもたちが家から餌用に野菜を持ってくるのですが、先日エリンギを持ってきた子どもがいました。どのようなものを食べるのか試してみたかったのでしょうか。年度終わりには、年長児から

年中児に、餌当番の引継ぎをしています。その他にもブンチョウの世話、植物の水やり当番もしています。新たにやってきたブンチョウを鳥小屋に入れた時のことです。戸惑っているブンチョウを見て、4～5人の子どもたちが鳥かごを囲んで、「小鳥はとっても歌が好き～」と歌っていたそうです。子どもたちは子どもたちのやり方でブンチョウを励ましているのだろうと感じました。

人はものを見るときには、自分の心を鏡のように反映させます。ものを言わない生き物に対して、相手の気持ちを推し量りながら、自分の気持ちを反映させたのではないかと思います。他者への共感を学ぶ大切な機会になっていたのではないでしょうか。生き物を大切にするという事を学んで、生き物も大切、人も大切、自分も大切という気持ちが育てばいいなと思います。そして、生き物の生命誕生や死によって、相手を大切にしている分だけ、子ども達が日頃体験しないような嬉しいことや悲しいことを体験する貴重な機会となると思います。

また、生き物は、絵画や建築などのデザインの発案の材料・対象や絵画の素材にもなっています。花や蝶の美しさ、花のいい香りや生き物の形のおもしろさなどをいっぱい感じ、知らず知らずのうちにその要素を内包する体験になって欲しいと期待しています。

## 子どもが自然・生き物と触れ合う環境の工夫

保育園(所)・幼稚園の保育室や園庭、テラス等に、動物を飼育したり植物を植えたりして、子どもたちが自然に自由に触れる環境を作りましょう。探したり、発見したりする喜びを味わうには、草むらがあると良いと思います。チョウの食草を園庭に植えるのもいいでしょう。子どもたちが食べるためだけではなく、虫が食べる植物を植えるのもお勧めです。ミカンの木があると、アゲハチョウが卵を産むためにやってきて、幼虫の観察ができます。

生き物を飼育するポイントとしては、子どもが生き物を怖がらないように、小さなサイズにしましょう。

また、飼育しやすいものを選ぶことも大事です。手間がかからず、簡単に置くだけでいいもの、先生も子どもも飼って楽しいものがいいと思います。

以前、海の磯観察で潮間帯の生き物を見つけたので、少しだけ海水と一緒に持って帰り、幼稚園で数ヶ月飼っていました。ホームセンターで販売されている水槽は海水でも使えますし、人工海水も市販されています。「家庭から海に遊びに行ったときに磯から離れませんでした」との保護者の声も聞きました。身近に磯の生き物がいることで、子どもたちの関心が膨らんでいたのでしょう。潮間帯や渓谷等では多様な生き物を見ることができます。園から出かけることは難しいかもしれませんが、何かの機会に出かけた折に、子どもたちが興味をもって生き物に関われる工夫は園(所)でもできるのではないでしょうか。

もてるかな・・・？　小さいサワガニは触れるよ。

ダンゴムシころがし・・・。

## 子どもの観察力の育み

私の子どもが2歳頃のことです。ハエトリグモという小さなクモが塀にいました。クモが逃げてはそれを追いかけている姿がとてもおもしろかったのですが、多分、彼はハエトリグモを、「生き物」という概念ではなく、ただ動くものとして捉え、動いているからそれを追いかけていたのではないかと思います。幼児が鳩や蝶を追いかけているのは、「動物は動く」という大きな気付きです。

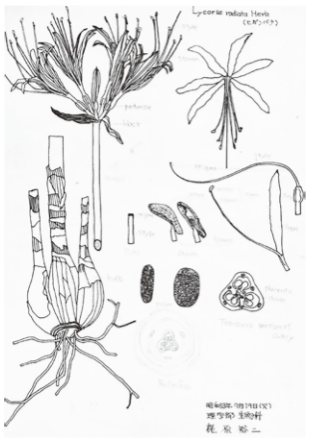
それでは植物はどうでしょうか。「動かない植物」の変化に気づけるような工夫が必要になります。芽生えや開花、結実、紅葉、収穫等を取り入れてみましょう。ひまわりのタネの芽生え探しをしたり、落ち葉で遊んだり、果物や野菜の収穫をして食べたりすることで、動物のように目に見えて動かないけれど、植物も変化していくことに気付けます。

幼稚園の子どもたちが描いた絵が保育室に飾られていました。ヒガンバナの絵では、ダイナミックに描かれている中にも集合花であることや、特徴的な先端のおしべを描いたりしています。シクラメンの絵では、緑の葉っぱに白い点々が描いてあります。斑に気がついているのです。子どもがよく見ていることに驚きます。私も学生時代にヒガンバナのスケッチをしました。6～7時間かけて、4～5種類の植物を描けば、今までにない観察力が身につきます。大人でもそのようにして観察力や知識を身につけるのです。

子どもの見方の大らかさを大切にしながら、一方で観察力を育むことも大切ではないでしょうか。興味があるものを観る(watch)ことは、知らず知らずに観察力がついてきます。以前幼稚園で子どもに「先生、どうしてこのカメの目は丸いの?」と尋ねられました。「他のカメはどうなの?」と聞き返したら、即座に「このカメだけ丸い、他のは違う」と答えたので、よく見ると、本当に一匹だけが丸かったのです。思わず子どもに向かって生物学的な自分の見解を述べてしまいましたが、子どもにとってはそこまでは興味がなかったようです。カメが好きで興味をもって毎日観ている中で、すばらしい観察力を発揮しています。それは生物学を専攻している私が驚くほど、とても専門的な気づきでした。

このように、保育園(所)・幼稚園では、子どもが気付く機会や環境の提供を心掛けていってほしいと思います。小さい頃の生き物や自然との関わりは子どもたちにとって将来の楽しみとなります。そして、大人にとっても生き物や自然はとても楽しいものだと思うのです。

ヒガンバナのおおらかな絵、しっかり観察しています。



大人も観察力を育むために・・・。

## ■執筆者紹介

**岡本 拡子**（おかもと ひろこ）
子どもの感性と表現する力を育てるための音楽

高崎健康福祉大学人間発達学部子ども教育学科教授。NPO法人わくわく広場の会理事長。大学在学中より「歌のお姉さん」として幼稚園・小学校や全国親子劇場などでコンサートに出演。現在は,保育者養成に携わりながら、保育現場等でのコンサート活動を行う。子どもの歌の作詞・作曲や保育者研修の講師、保育・子育てに関する講演を行うなど活動の場は広く多くの現場関係者に支持されている。社会活動の一環としてNPO法人を設立し多文化共生のまちづくり、子どもの居場所づくり、生活困窮者家庭の子どものための学習支援事業に携わる。
<主な著書>アクティベート保育学:保育内容「表現」(編著)ミネルヴァ書房、感性をひらく表現遊び(編著)北大路書房、学校音楽の理論と実践をつなぐ:音楽教育実践学事典(共著)音楽之友社

**梶原 裕二**（かじわら ゆうじ）
生き物や自然と関わることで子どもの心に育つもの

京都教育大学生物学教室・教授。附属環境教育実践センター長。
元京都教育大学附属幼稚園園長。
附属幼稚園園長の際、子どもの好奇心の発揮、発想の豊かさや観察力に感心していました。
専門分野は生物教育、実験形態学、哺乳類発生学。
<主な著書>簡易凍結徒手切片法で生物の体を調べる・生物の科学遺伝71巻(5)NTS社(2017年)、理科教員の実践的指導のための理科実験集・電気書院(2117年)

## ■協力園

表紙：社会福祉法人 虹旗社 のはら保育園（東京都　杉並区）

## ■「健康教育®」あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育®」。
1956 年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。
**読者対象** / 日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育®」をご愛読頂きまして、誠にありがとうございます。
編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にして頂ければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介（例：当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等）、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非お聞かせください。
なお、お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

お問い合わせ・ご連絡先

**河合薬業株式会社　「健康教育®」編集部**

〒164 - 0001　東京都中野区中野６丁目３番５号
TEL：03 - 3365 - 1110（代）　FAX：03 - 3365 - 1180
E - mail アドレス：genkikko@kawai-kanyu.co.jp
ホームページアドレス：http://www.kawai-kanyu.co.jp

肝油ドロップは「よみきかせ」を応援しています。

高橋みなみのこれから何する?「よみきかせ」 80. Love TOKYO FM [ FM80.0MHz（月曜日～木曜日14:30頃～）]

健康教育® No.189
2020年4月発行

発行:河合薬業株式会社
東京都中野区中野6丁目3番5号
TEL.03-3365-1110（代） FAX.03-3365-1180